

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：25301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463430

研究課題名(和文) 外来がん化学療法を受ける在宅療養高齢者の生活調整サポート支援システムの構築

研究課題名(英文) A Study Toward Establishing a Living Adjustment Support System for Elderly Cancer Patients Undergoing Outpatient Chemotherapy at Home Care

研究代表者

名越 恵美 (Nagoshi, Megumi)

岡山県立大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：20341141

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：外来化学療法を受ける在宅療養高齢者と家族はネガティブな感情を持ちながらもお互いに気遣いながら在宅療養継続の調整をしていた。さらに自宅での価値観を尊重しQOLを保っていた。お互いが高齢者であると認識し、無理をしないようにコントロールしていた。サポートは、家族と医療従事者であった。在宅療養高齢者と家族は、現在の状況を保つために家族が協力してバランスを保っていることが明らかになった。

在宅高齢療養者と家族は、療養体験が継続することで、相互関係が進み、家族のコーピングパターンが続くと考える。そして、コーピング戦略を理解するための高齢者と家族間での人生の話に積極的に耳を傾けることの重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The elderly cancer patient and family, even while having negative emotions. They recognized as the elderly persons with each other, and ambivalent narratives of anxiety and importance to the remaining time were observed. The above findings suggest that the experience of elderly families living with cancer is the one in which the family members attempt to maintain the present balance through cooperation.

The spousal caregiver feels a responsibility to support for the patient's well-being as the "elderly cancer patient's family." It is thought that the elderly cancer survivor couple makes a progress in the mutual relation between the survivor and spousal caregiver by keeping on care experience, and continues their coping pattern as a married couple. And it was suggested that actively listening to the life stories between the survivor and spousal caregiver is important in order to understand the coping strategy.

研究分野：医歯薬学

キーワード：がん看護 高齢者 在宅療養 治療継続 外来化学療法

1. 研究開始当初の背景

がん対策基本法(2006)に基づく前基本計画(2007)の目標達成によって、がんの年齢調整死亡率は減少傾向にあり一定の成果を得られた。しかし、人口の高齢化とともに生命予後が延長されることにより、がん体験者も高齢化している状況にある。人生の終生期にある高齢がん体験者は、加齢に伴う運動機能・認知機能の低下といった老年期の特徴に加え、化学療法による副作用の出現により、治療計画実施に伴う体調管理や生活スタイルの変更に多くの労力を必要とすることが推察される。がん対策推進基本計画(2012)における全体目標では、「すべてのがん患者とその家族の苦痛の軽減と療養生活の質の維持向上」を掲げている。このことから高齢化したがん体験者が安心して自分らしく在宅で療養生活を継続するために日常生活上を再構築できるような自己管理支援を行うことは、必要な看護援助であると言える。

2. 研究の目的

患者・家族が加齢に伴う変化と化学療法の副作用の影響を予測し、次の治療に向かうための生活の再構築を明らかにし、外来がん化学療法を継続するための在宅療養高齢者生活調整サポート支援システムの構築を検討する。

3. 研究の方法

(調査1) 国内外の慢性疾患を持つ高齢者の生活状況の研究について文献検討し、がん体験者に特化した日常生活の困難さ・生活の再構築・生活の折り合いのつけ方の要素を抽出する。

(調査2) 外来がん化学療法を受ける在宅療養高齢者の生活上の困難と生活調整について患者・家族に半構造化面接を実施・調査し、その特徴を明らかにする。

(調査3) 在宅療養高齢者の生活調整の内容に応じたサポート状況について量的に検証する。

その後QOLの維持と療養生活への適応を図るための生活調整サポート支援システムの構築を検討する。

4. 研究成果

(調査1)

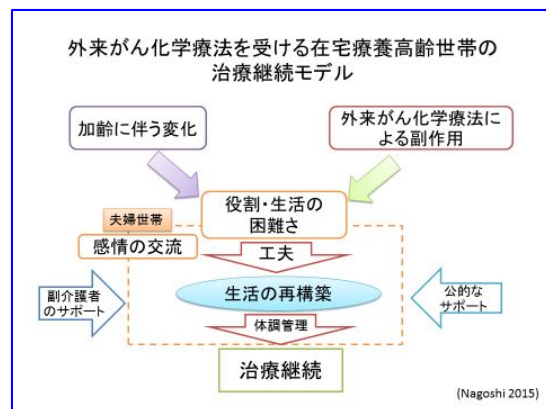
医学中央雑誌(2014.5.28.現在)を使用し、「生活調整」をキーワードとし系統的検索を行う。さらに研究方法、キーワード、研究参加者、対象疾患、研究内容について整理した。その結果、「生活調整」で検索の結果、原著43件が検索された。さらに「生活調整」「原著」「看護」で絞り込み35件の文献が選定された。対象疾患を慢性疾患に限定し最終的に12件の文献が絞り込まれた。対象疾患は、心疾患、糖尿病、呼吸器疾患、がん等であった。研究内容として、「行動変容」「疾患による自己再考」「限界の見極め」「エネルギー配分」「身体の負担にならない方法」「悪化予防」「日常生活の制限」「年齢の影響」等が見られた。

生活調整については、糖尿病などの長期の自己コントロールを必要とする疾患において、療養者は「身体変化が実感できないことによる状況把握が困難」であり、生活調整の苦痛や努力が語られていた。一方、活動強度により身体症状に影響を受ける慢性心不全では「身体が教えてくれる限界を頼り」に、在宅酸素療養者は、「悪化予防のための自己管理」を行い、「日常生活の制限」をしていた。また、がん体験者の場合は、「症状管理」とともに「医療への期待」や「最期の過ごし方の決定」を行い、「闘病力は年齢」と認識し、「年齢の影響を受ける」とあった。すなわち、いずれの疾患の療養者であっても、自分自身の身体の変化をアセスメントしながら生活調整を行っていることが明らかになった。

また、がん以外の慢性疾患との比較から、疾患による症状の特異性が明らかになった。

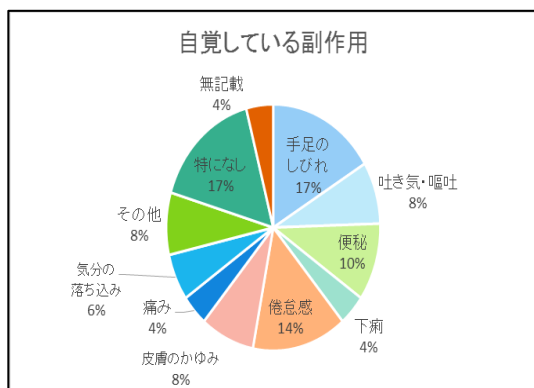
(調査2)

外来がん化学療法を受ける在宅高齢がんサバイバーと家族の体験を明らかにし、具体的支援を検討することを目的とした。書面にて同意の得られた対象者に、半構造化面接を行った。データは逐語録を作成しコード化、抽象度をあげてカテゴリー化を行い、質的因子探索的な分析を行った。研究参加者の平均年齢は73.6歳、家族は、配偶者と副介護者を含め65.1歳。分析の結果、足腰が弱らないように体力保持 現状維持のための体調管理 副作用の出現と悪化予防 禁止事項・決心を遵守 転ばないように活動範囲を縮小 介護負担にならないよう調整 がんに対する畏怖と発症への無念 治療継続手段への不安 欲しい治療情報を聞けない葛藤 家族への信頼と感謝 夫婦で共に過ごす時間が大切 元の生活へ戻る努力 生きがい・役割を持続 の15カテゴリーが抽出された。家族は、「がん患者の家族」として患者の幸福のためサポートに責任を感じる。また、残された時間への不安と価値づけによる葛藤を持つ。がんサバイバーと家族は、療養体験が継続することで、相互関係が進み、家族のコーピングパターンが続くと考える。そして、コーピング戦略を理解するためサバイバーと家族間での人生の話に積極的に耳を傾けることが重要である。



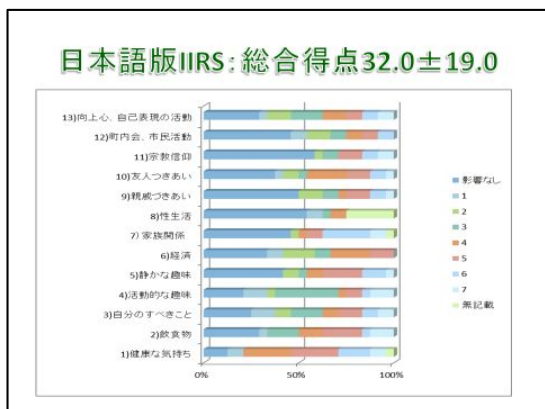
面接を患者本人、主介護者となる配偶者、副介護者に分け、分析したところ今後増加する夫婦二人世帯において世帯を一つのユニットとしてとらえ、介入することが必要であることが明らかになった。さらに、公的サポートだけでなく、インフォーマルサポートとして副介護者を巻き込むことの重要性が示唆された。

(調査3)



外来化学療法を受けるがん患者の生活への影響の特徴を明らかにすることを目的に日本語版 IIRS によるアンケート調査を実施した。質問項目は、基本的属性と病名、副作用、関係性と個人の発展、親密さ、構成・道具についてであった。その結果、化学療法の副作用として、手足のしびれ、倦怠感、便秘・下痢がみられた。生活への影響として、関係性に関する変化は少なく、親密さは低かった。総合得点は全体的に低く、病気・治療への生活の影響が明らかになった。

外来化学療法を受ける高齢者は特に活動性が低下する傾向にある。日常生活を維持し QOL を低下させないためにメンタル面の支援と食に関する支援、また、関係性を継続するための支援が必要であることが明らかとなった。



## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

門倉康恵、名越恵美：化学療法を受ける

がん患者の意思決定に関する研究の概観、  
査読あり、キャリアと看護研究 4 巻 1 号  
P41-49、2014

[学会発表](計 14 件)

名越恵美、門倉康恵：日本語版病気侵害  
尺度による外来化学療法を受けるがん患  
者と特徴、第 22 回緩和医療学会学術大会、  
2017 年 6 月 23 日、横浜市

名越恵美：シンポジウム 外来化学療法  
を受けるがんサバイバーと家族の体験、  
第 3 回アジア未来会議、2016 年 9 月 30  
日、北九州市

Megumi NAGOSHI：THE EXPERIENCE OF AN  
ELDERLY CANCER SURVIVOR COUPLE  
UNDERGOING OUTPATIENT  
CHEMOTHERAPY, ICCN2016, 2016.09.4-7.  
Hong Kong.

Megumi NAGOSH, Keiko Matsumoto, Mineko  
Namba：Experiences of Japanese Couples  
Living with Cancer and Receiving  
Outpatient Chemotherapy, 19<sup>th</sup> EAFONS,  
Chiba city. 2016. 2016.03.14-15.

遠藤康恵、小山直夏、名越恵美：がん化  
学療法を受ける患者のレジリエンスに関  
する研究の概観 国内文献からの検討、  
第 30 回日本がん看護学会学術集会、2016  
年 2 月 22 日、千葉市

名越恵美、門倉康恵：外来がん化学療法  
中のがん患者に関わる看護師の意思決定  
支援に関する研究、第 30 回日本がん看護  
学会学術集会、2016 年 2 月 21 日、千葉  
市

寺下由佳、文谷梨絵、塩田真美、名越恵美：  
外来がん化学療法を受ける患者・家族に  
対するがん化学療法認定看護師の関わり、  
第 30 回日本がん看護学会学術集会、2016  
年 2 月 22 日、千葉市

名越恵美、門倉康恵：外来がん化学療法  
を受ける在宅高齢がんサバイバーの家族  
の思い 副介護者の事例、第 30 回日本が  
ん看護学会学術集会、2016 年 2 月 21 日、  
千葉市

名越恵美、難波峰子、松本啓子：日中独  
居となる在宅高齢がん体験者の生活調整  
に関する 1 事例の分析、第 35 回日本看護  
科学学会学術集会、2015 年 12 月 5 日 広  
島市

名越恵美、松本啓子：外来化学療法を受  
ける在宅高齢がん体験者の配偶者が行う  
生活調整、第 41 回日本看護研究学会学術  
集会。2015 年 8 月 23 日、広島市

名越恵美、門倉康恵、難波峰子：外来化  
学療法を受ける在宅高齢がん患者の生活  
調整、第 20 回日本緩和医療学会学術大会、  
2015 年 6 月 19 日、横浜市

Megumi Nagoshi, Keiko Matsumoto:The  
Awareness of Certified Chemotherapy  
Nurses in Support of Cancer Patients '  
and Family's Decision-Making at  
Outpatient Departments,

APHC2015,04.30-05.03,Taipei

名越恵美、門倉康恵、遠藤康恵：夫婦二人暮らしにおける高齢が体験者の治療継続のための生活調整、第29回日本がん看護学会学術集会、2015年2月28日、横浜市

難波峰子、名越恵美、松本啓子：慢性疾患を持つ療養者の生活調整に関する国内文献の検討と今後の課題、第33回日本看護科学学会学術集会、2014年11月29日、名古屋市

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

名越恵美 (NAGOSHI Megumi)  
岡山県立大学・保健福祉学部・准教授  
研究者番号：20341141

### (2) 研究分担者

松本啓子 (MATSUMOTO Keiko)  
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・准教授  
教授 (平成28年より)  
研究者番号：70249556

難波峰子 (NAMBA Mineko)  
岡山県立大学・保健福祉学部・教授  
関西福祉大学・看護学部・教授 (平成27

年より)  
研究者番号：20461238

### (3) 研究協力者

門倉康恵 (KADOKURA Yasue)  
松田病院・がん化学療法認定看護師